

英語教育における英語学<sup>†</sup>

浅野 一郎\*

宇都宮大学教育学部\*

英語教育の場で役に立つと思われる新しい英語学・言語学の知識を検討・整理し、英語教育現場での利用の可能性を探る。今回は、基本文型、副詞類という概念の導入、前置詞句の2つの用法における日本語と英語の違い、“会話の含意”の文法事項との関連可能性、を検討する。

キーワード：学校文法、英語科教育法、5文型、7文型、副詞類、Adverbial、前置詞句、会話の含意

## 1. 初期に教える基本文型について

## 1.1 ‘5文型’の不十分さと‘7文型’

日本の英語教育では、‘5文型’という概念が基本的な知識として教えられる。文科省の現行中学校指導要領においても、教えるべき文を5文型に分類し、さらに動詞に後続するものの種類によって、それを細分化している。

池上(1995)は‘5文型’の不十分さを指摘している。同書は、狭い意味での‘文法’の問題にとどまらず、コミュニケーション成立のために必要な、‘語法’や‘使用域’‘情報構造’‘コンテキスト’などの語用論的条件まで広く扱っているが、文法の問題として、まず、‘5文型’という概念の不十分さを指摘する。

‘5文型’分類では、(1)(2)のような文はS V型と認定されるが、それらの文は、(3)のようにS Vだけでは成立しない。

(1) He went to the station.

(2) He looked at the girl.

(3) He smiled.

(1)(2)内の前置詞句は、文の完結性に不可欠な要素である。基本文型が単文の完結性のため必要不可欠な要素を表すものとするならば、(1)(2)のためには別個の文型を認めねばならない。

‘副詞類’という概念を英語教育に導入することは、‘5文型’の不備を補う意味で有益であると思われる。

‘副詞類’(Adverbial)は品詞を表す‘副詞’と違い、

副詞的働きをするものの総称で、(1)(2)の前置詞句なども、その機能に着目した場合、副詞類と呼ばれる。池上(1995)も言及する、Quirk et al.(1985), Greenbaum and Quirk(1990)は、節を(4)のように7文型に分類する。AはAdverbialの略である。

(4)<sup>1)</sup>

① S V The sun is shining.

② S V O That lecture bored me.

③ S V C Your dinner seems ready.

④ S V A My office is in the next building.

⑤ S V O O I must send my parents an anniversary card.

⑥ S V O C Most students have found her reasonably helpful.

⑦ S V O A You can put the dish on the table.

(1)(2)などは④のS V A型と分類され、さらに⑦のようなS V O A型が追加されている。④⑦のような文では、場所を表す表現は省略できない。文の完結性のためにAを必要とする動詞があることが、これら2文型で表されることになる。

文型表記のS, V, O, Aは、句の種類ではなく機能を表すことに注意する必要がある。また、Quirk達は、Vをverb phraseの略と言うが、筆者は生成文法の分析に従い、verb phrase (VP)という表示は‘動詞を主要部とする句’を指すために取っておき、Vをverbal sequenceを意味するものと解釈する。

7文型の要素としてのAは、‘副詞類’(Adverbial)の一般的用法と区別をする必要がある。‘副詞類’は副詞的に働く句の総称であり、たとえば(5)のtodayのように動詞の種類に関係なく出現可

<sup>†</sup> Ichiro ASANO\*: English Linguistics in English Language Teaching 3.

\* Faculty of Education, Utsunomiya University

能であり、その場合は、省略しても文の完結性が損なわれない。

(5) The sun is shining today.

一方、従来からある S, V, O, C は、単文の中では、文型の要素としてのみ出現する。<sup>2)</sup>

7 文型の要素として A を不可欠に必要とするか否かは、動詞が表す‘状況’次第である。英語の *put* が表す状況は、‘行為者’と‘行為の対象’と‘行為後の対象の位置’を含むように、言語的に表示されねばならない。そして多分、心的にもそう表示されているのであろう。<sup>3)</sup>

## 1.2 ‘文型’の有用性について

池上(1995)は、‘5 文型’を‘7 文型’に改良したとしても、‘文法’には限界があるとして論を進める。例えば、同じ SVO 型になる(6)(7)(8)には、S, O などの構成要素の意味的機能に大きな相違があることを指摘する。<sup>4)</sup>

(6) A cat bit a rat.

(7) John loves Mary.

(8) John had blue eyes.

(6)は‘動作主’が‘対象’に対してある‘行為’をしたことを意味する。(7)の普通の解釈では、*John* は‘動作主’とは解釈されず、*love* も‘行為’ではなく心の‘状態’である。(8)の *have* も‘行為’ではなく‘状態’であり、*John* は‘動作主’ではあり得ない。(ある特性をもつ‘対象’とでもいえよう。<sup>5)</sup>)

このように、英語の SVO 文型は、意味的に多様な‘状況’を表現するために使われる。その構成要素の担う意味的機能は様々である。それが問題なのは、池上が指摘するように、“これらの意味的な機能が、<文法>とは直接関連性のない<意味>という分野でもっぱらはたらくというようなものではなく、実はそのような<意味>的な機能の上での差が文の<文法>上の性質にも、様々な形で関係してくる”<sup>6)</sup>からである。

例えば以下の例のように、(7)(8)が進行相を取ることができないという文法上の性質は、動詞が‘状態’を表すからであり、(8)が、SVO 文型であるにもかかわらず受動文となり得ないのも、文が表す意味的状況に関係がある。<sup>7)</sup>

(7') \*John is loving Mary.

(8') \*John was having blue eyes.

(9') \*Blue eyes were had by John.

‘文型’がこのように“頼りない”ものであるならば、(初期の)英語教育で使うべき概念か否かが問題となるが、筆者は、文型はやはり、英語教育において有用であると考える。

水谷信子(1985)は、英語話者の自然な話し合いの録音データから、143 の完全文(総語数 1,268 語)を抜き出し、5 文型の出現頻度を調査している。

結果は、以下のようであったという。

SV	SVC	SVO	SVOC	SVOO	計
23	55	62	3	0	143

この調査から、日常の自然な会話では、SV, SVC, SVO の 3 文型が圧倒的に多く使われ、SVO, SVC, SVOO の頻度は極端に少ないことが判る。それは、SVOC, SVOO の文型を必要とする動詞の数が限られていることに関係するはずである。

「SVOC や SVOO の文型を必要とする」という規則性は、限られた数の動詞の特性として覚えればよい。英語教育の現場でも、これらの文型は、他の 3 文型の習得後に導入されている。この調査では対象となっていない、SVA, SVOA に現れる動詞も、数は限られている。

一方、動詞が、SV, SVC, SVO の 3 文型のいずれの文型に出現するかは、動詞の意味からかなり推測されることではあるが、*look at* と *see* のように文型を個別に覚えねばならない場合もある。

浅野一郎(2006)で指摘したように、多くの大学生が、  
A: Did you see Mary yesterday?

B: \*Yes, I saw.

のような作文をすることから考えると、「ええ、会いました」のように日本語が目的語を省略できることの英語への転移の影響は無視できない。

さらに、動詞によっては、複数の文型に現れるものもある。*The horse kicked me/kicked at me.; She climbed the tree/climbed up the tree.; He broke the vase./The vase broke.*などは一例であるが、このような交替可能性と意味の違いを教えるときにも、前提として‘文型’の概念が必要であろうと思われる。<sup>8)</sup>

初期の英語教育において、‘文の完結性に不可欠な要素を含む基本文型’を意識させることは、生徒にさほど負担をかけるものではなく、英語の正しい運用のためにも、必要であると考えられる。

## 2. 英語前置詞句の2用法と対応する日本語

1.1で、(4)④,⑦に見られるような前置詞句の文法機能を‘副詞類’(Adverbial)と呼んだが、前置詞句には、(10)におけるように、名詞修飾という文法機能もある。<sup>9)</sup>

### (10) my uncle in Canada

日本語の[名詞+助詞]を英語の前置詞句に対応する後置詞句と見なすと、前(後)置詞句は、副詞類、名詞修飾という共通の文法機能を持つことが理解できる。

日英語の前(後)置詞句は、文法機能においては、副詞類、名詞修飾という同じ用法を持つが、形式に関しては、英語が不変化である一方で、日本語においては変化する場合がある、という違いがある。これは日・英語学習における困難性の一要因となるかもしれない。

(11) a. カナダに住んでいる。<sup>10)</sup>

b. カナダの伯父

c. \*カナダにの伯父

(11') a. My uncle lives in Canada.

b. my uncle in Canada

(12) a. 京都で開かれた。

b. 京都の大会

c. 京都での大会

(12') a. The convention was held in Kyoto.

b. the convention in Kyoto

このような例に関して、英語学習者は、不変化の前置詞句が違った用法を持つことを学ばばよい。一方、日本語を学習する英語母語話者は、副詞類、名詞修飾という用法によって助詞の使い分けを覚える必要がある。

寺村秀夫(1980)は「日本語を学ぶ英米人に「コレハ私ノ先生カラ推薦状デス」といった誤りが多い…」と述べている。寺村は日本語における助詞の変化を以下のようにまとめている。<sup>11)</sup>

——連用の「N+格助詞」は「ノ」を伴って連体に転じるとき、ガ、ヲ、ニは消えて単に「Nノ」となる。カラ、ヘ、マデ、トなどは、それらの後にノが付く。デの場合はどちらもあり得る。

寺村の言明は、(本編の筋からはずれるが、)色々おもしろい事実気づかせてくれる。まず、ガ、ヲ、ニの格助詞とカラ、ヘ、マデ、トなどの助詞との振る舞いの違いである。これは、会話体での助詞脱落可能性の差に呼応する。

(13) <sup>12)</sup>

- a. 太郎ちゃん がお菓子 を 食べちゃった。
- b. 太郎が花子 から 手紙を受け取った。
- c. 太郎がナイフ で ケーキを切った。
- d. 太郎が花子 と 結婚したよ。
- e. 太郎が花子 に ふられたよ。<sup>13)</sup>

格助詞と他の助詞には、数量詞遊離(quantifier floating)の可能性に関しても相違がある。<sup>14)</sup>

(14) a. 学生3人が/学生が3人 訪ねてきた。

b. 先生は 学生3人を/学生を3人 落第させた。

(15) a. 学生3人から/\*学生から3人 年賀状を貰った。

b. 飲み屋3件で/\*飲み屋で3件 酒を飲んだ。

(14)に見るように、数量詞は格助詞を飛び越して遊離できるが、(15)の助詞は飛び越せない。寺村の言明にある名詞修飾における助詞の変化は、これらの諸事実とも関連させて、説明することが望ましい。

英語教育学習上の問題に立ち返って、日本人に多い誤りに関して、筆者は調査していないので推測に過ぎないが、「カナダの伯父」「京都の大会」のような語句の英訳では、かなり誤答がでるものと思われる。また、(16)(17)に見られるような、名詞句表現での前置詞の出現も、日本人にとって難しいことが予測される。

(16) a. They visit the moon.

b. the visit to the moon

(17) a. He married the widow.

b. the marriage with the widow

## 3. ‘会話の含意’の文法での役割を考える

英語科教育法の授業で、英語教師に必要な知識として、‘会話の含意’について話したとき、「実際の英語教育で、それがどう役に立つのですか?」という質問を受けたことがある。

‘会話の含意’(conversational implicature)が英文法の事実とどう関係するかを考察するのが本章の目的である。

### 3.1 ‘会話の含意’とは

英国人哲学者 Paul Grice が導入した、発話で実際言われている文字通りの意味と、言外に‘含意’される意味との区別は、話者と聴者がどのようにコミュニケーションを成立させるかについての一般理論の重要な原則である。

*Can you pass me the salt?*という文は、“あなたは塩を渡すことができますか?”という文字通りの意味を持つが、その文がよく発話される食卓の場面

では、単なる‘疑問’というより“塩を取って下さい”という‘依頼’として解釈される。

このようなコミュニケーションは、文字通りの意味のみによる直接的なものではなく、いくつかの推論を経てなされる間接的コミュニケーションである。話者と聴者が会話において、コミュニケーションを成立させることができるのは、両者にコミュニケーションを成立させようとする姿勢があるからであるとして、Grice はそれを‘協調の原則’ (cooperative principle) と名づけた。そして、協調の原則を守るためには、以下のような具体的規則：会話の公理 (maxims of conversation) に従うと仮定した。<sup>15)</sup>

#### (18) 会話の公理

- i. 量の公理：必要な量の情報だけを与え、それ以上でもそれ以下であってもいけない。
- ii. 質の公理：偽と思われることや根拠のないことはいわない。
- iii. 関係の公理：関連性のないことをいうな。
- iv. 様態の公理：表現はわかりにくさや曖昧さを避け、できるだけ簡潔に、秩序だてよ。

*Can you pass me the salt?* を‘要求’と解釈する場合に働くのは、関係の公理である。関係の公理によって聴者は、一見会話の公理を破っているように見える発話を、「話者が食卓で塩を渡すことができるかどうかの単なる‘能力’という関連性のないことを聞くはずがないから、何か別の意味を持つはずだ」と判断し、話者が塩に手のとどかない状況に気づいた結果、「話者は塩を渡して欲しいのだ」と推論する。このように、一見会話の公理を破っているように見える発話の理解のために推論して導かれる意味が‘会話の含意’である。

疑問文が間接的要求として使われることの詳しい説明のためには、断定文の意味を探るのみに有効な真理条件に替わる、疑問、要求、約束、などの発話行為が成立するための‘適切さの条件’という概念が必要になるが、本編でそれについて述べる余裕はない。

ここでは、次に述べる文法事項と関連する、量の公理が働く例を見ておこう。

(19) Some of the audience left the room before the first speaker had finished.<sup>16)</sup>

(20) “Not all of the audience left the room before the first speaker had finished.”

人は(19)を聞くと、(20)‘聴衆の全てが部屋から出

て行った分けではない’という意味を推測する。これは論理的必然として意味されるもの：論理的含意 (entailment) ではない。

論理的含意とは、例えば(21)が(22)を含意することを指す。

(21) John is a bachelor.

(22) John is unmarried.

(21)が真であるならば、(22)も必ず真となる。一方、“some”は“not all”を論理的に含意しない。<sup>17)</sup> ‘聴衆の全てが部屋から出て行った分けではない’という推測は、量の公理によって導き出される。すなわち、聴者は話者が量の公理に従い、必要な量の情報を与えているはずだと判断する。

もし、‘聴衆の全てが部屋から出て行った’ことを知っているならば、*All of the audience...*というはずである。必要な量以上の情報を与えないように *some* を使ったのだから ‘all’ を意味するはずはない。これは論理的含意ではなく会話の含意である。

会話の含意は‘取り消し’ (cancel) が可能という点で、論理的含意と区別できる。

(23) Some if not all of the audience left the room before the first speaker had finished.

これは、“全てという可能性を否定するわけではないが、少なくとも幾人か”という意味になるので、“not all”という含意が取り消されている。一方、*John is a bachelor, but I don't know if he is married.* は意味のおかしな文となる。

### 3.1 文法事項に関わる例

(24)の例のように、現在完了形か単純過去形のどちらを選択するかは、表現しようとする状況に依存するようだ。

(24) a. She has given an interview only once in her life.

b. She gave an interview only once in her life.

Greenbaum and Quirk (1990), p. 52 は a. と b. の文はそれぞれ、(25)のように展開できると指摘する。

(25) a. She has given an interview only once in her life (but she may yet give another interview).

b. She gave an interview only once in her life. (She can give no more interviews, since she is dead.)

現在完了形は、過去に始まり現在まで続くある期間内のある不特定の時点での状況を表すために使わ

れる；単純過去形は、一つの用法として、過去のある特定の時点での状況を表すために使われる、といえる。

ところで、(24 a)が真であれば(24 b)も真となる。インタビュー総回数1回を含む生涯という期間が現在まで存在するならば、そのインタビュー総回数1回を含む部分下位期間が必ず存在する。その期間は必ずしも現在まで存続していなくても良い。一方、(24 b)が真であっても(24 a)が真であるとはいえない。インタビュー総回数1回を含む期間が過去に存在することは、その期間が現在まで続く期間であるとは限らない。

インタビュー総回数1回を含む生涯が現在まで続いている状況を表すのに、その期間が現在まで続いているかどうかを明示しない表現を使用するのは、量の公理に違反する。聴者は、話者も量の公理を守ることを前提とするので、会話の含意として、言外の意味を、その期間が現在まで続いている（すなわち彼女の生涯は終わっている）と解釈するのではないだろうか。

“インタビュー総回数1回を含む生涯という期間が現在まで続いている”というニュアンスが会話の含意だとすれば取り消し可能なはずである。一方、現在完了形がもつ“その期間が現在まで続いている”というニュアンスの方は会話の含意でないとするならば、(26)は何らかの意味で逸脱していると判断されるはずである。

(26) She has given an interview only once in her life. (She can give no more interviews, since she is dead.)

注

- <sup>1)</sup> Greenbaum and Quirk(1990), p.204 より。
- <sup>2)</sup> 移動規則によって、基本文型から逸脱した文では、この限りでないことはいうを待たない。
- <sup>3)</sup> ‘置く’という状況を表す場合、‘行為後の対象の位置’が表現されるか否かは通言語的に検討に値する。  
(i) He put down his pen.  
(ii) 彼は筆を置(搁)いた。
- <sup>4)</sup> 池上(1995), p.38ff.
- <sup>5)</sup> (8)に対応する一番自然な日本語は、「ジョンは目が青い」であろう。これはジョンの特性を表す文と言える。

<sup>6)</sup> 池上(1995), p.41.

<sup>7)</sup> (7') (8')を非文とするのは、通常の *love* や *have blue eyes* の意味においてである。肉体的愛撫の *love* や、一時的に青いコンタクトレンズを入れていたことを表現するものとしては的確となる。

(9')を適格とする状況は思い浮かばない。この不的確さには、心的表示が関係していよう。

<sup>8)</sup> 例は、Huddleston and Pullum(2002), p. 296ff.より。

<sup>9)</sup> 前置詞句の文法機能としては他にも、他の前置詞の補部(*from under the bed*)、形容詞の補部(*very keen on surfing*)、名詞の補部(*the key to the safe*)などがあるが(Huddleston and Pullum(2002), p. 646 参照)、ここでは、英語教育上の主要な用法として、2用法のみを取り上げる。

<sup>10)</sup> 寺村秀夫(1980) p. 231ff. より。

<sup>11)</sup> 寺村秀夫(1980) p. 232.

<sup>12)</sup> 西光義弘(編)(1997) p.114 より。

<sup>13)</sup> この「に」は、格助詞ではなく、受け身文の意味上の主語に続く助詞で、脱落が不可能である。

<sup>14)</sup> 日本語の数量子遊離に関しては、Tsujiura (ed.)(1999) pp. 129-130 に概観がある。

<sup>15)</sup> 訳は大津他(編) (2002) p. 175 を参考にした。

<sup>16)</sup> Huddleston and Pullum(2002), p. 37 の例文である。

<sup>17)</sup> これは次のように証明できる。

「A, Bを論理式として、 $A \rightarrow B$ が真であるとき対偶  $\text{not}B \rightarrow \text{not}A$ は常に真となる。【出ていった人がある】 $\rightarrow$ 【全て出ていったわけではない】が偽であることを証明するために、真であると仮定してみる。その対偶【全員出ていった】 $\rightarrow$ 【出ていった人はいない】も真であるはずである。しかしそれでは【全員出ていったのに出ていった人はいない】という矛盾を真であるということになる。従って仮定が間違っていたことになる。

## 参考文献

- 浅野一郎. 2006. 「英語教育における英語学1」『教育実践総合センター紀要』第29号, pp. 487-492. 宇都宮大学教育学部附属教育実践 総合センター.
- Greenbaum, Sidney, and Randolph Quirk. 1990. *A Student's Grammar of the English Language*. Longman, London.
- Huddleston, Rodney and G. K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge University Press,

Cambridge.

池上嘉彦. 1995. 『<英文法>を考える』. 筑摩書房, 東京.

國廣哲彌(編). 1980. 『文法』日英語比較講座第2卷. 大修館書店, 東京.

水谷信子. 1985. 『日英比較話しことばの文法』. くろしお出版, 東京.

西光義弘(編). 1997. 『日英対照による英語学概論』. くろしお出版, 東京.

大津由紀雄・池内正幸・今西典子・水光雅則(編). 2002. 『言語学入門—生成文法を学ぶ人のために』. 研究社, 東京.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1985.

*A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman, London.

寺村秀夫. 1980. 「名詞修飾部の比較」. 國廣哲彌(編). 1980. pp.221-266.

Tsujimura, Natsuko (ed.). 1999. *The Handbook of Japanese Linguistics*. Blackwell, Oxford.